

山村における産業興し

～誇りと愛情の持てる地域を目指す上野村～

調査研究部 高木 英彰

1. はじめに

多野郡上野村は群馬県の南西部、山の奥深い地に存在する自治体である。人口は約1,300人。面積の94%を山林が占めており、平地が極端に少ない。産業立地としては不利、地図上では埼玉・東京に近いとはいえアクセス面でも有利とは言えない地域である。このように一見最も厳しい環境下にあるように見えながら、上野村はU・Iターン者を多く迎えており、周囲の町村が深刻な高齢社会になる一方で上野村は高齢化率を押し下げている。村役場や森林組合が東京など都市圏で採用活動を積極的に行っていることが一要因であるが、採用しきれないほどの応募を受けているという点では目を見張るべき村である。Iターン者にとって上野村の魅力とは何か。迎える上野村は何を意図してどのような取組みをしているのか。本稿ではその一部を報告する。

2. 上野村の交通と生活

上野村が属する経済圏の中心は富岡市にある。上野村から富岡市までは車で約40分、南牧村、下仁田町を経由して至る。2009年に上野村と南牧村を結ぶ『ふるさと林道湯の沢線』が開通したことにより、20分程度短縮されている。これにより通勤、買い物、観光の利便向上だけでなく、学生や高齢者の生活にも変化が起こった。それまでは上野村の子供は高校生になると、隣町（神流町）の万場高校に通うか、下宿して外に出るかの選択肢しかな



かった。そこに富岡市内の高校に自宅から通うという選択肢ができたのである。それに伴い上野村は独自に乗合タクシーを走らせ、高校生と車のない高齢者を乗せて下仁田・富岡方面の病院や高校への送迎をしている。

上野村から十石峠を越えると長野県佐久市に抜けられる。佐久市にはショッピングモールや佐久総合病院があるため、住民はこちらに出ることもあるという。しかし、こちらの道路の拡張整備は計画こそあったものの実施されていない。そのため、現在も狭隘な道路のみである。また、この道路は冬季になると積雪のため封鎖される。

村内では交通の不便さの軽減や災害時の対策のために、村内放送のほか、『うえのテレビ』が提供するテレビ番組やインターネット接続サービス(月額500円)により情報を村民

に届けている。

上野村にやってくるIターン者は、村営住宅か空いている高齢者住宅に入居できる。村では集落内交流の促進および集落文化の継承を目的に、彼らを一か所にまとめず各集落に分散させている。特にIターン者の一家が集落にすることで、高齢者に子供の声を聞かせることが重大な意義を持っている。

他方、Iターン者からしてみると、「農山村生活に憧れてやってきたものの、集落文化に馴染めない」という心配がある。しかし、「2次の隔たり」（知り合いの知り合い）の関係でほぼ全村民がつながる上野村においてはそういった情報は自然と伝わるため、村として所属集落の変更や転職等の対応が比較的容易にできるとのことである。

3. 上野村の産業

上野村には水田はなく、古くから畑作が中心である。昭和の時代にはコンニャクイモ、養蚕、林業が盛んであった。昭和中期にはコンニャクイモが換金作物として非常に魅力的な産品であったが、品種改良と他地域への栽培技術の伝播、そして輸入品の流入により大幅に減産した。養蚕も洋服文化の浸透と化学繊維の開発により衰退した。林業もまた、薪炭から石油へのエネルギー転換と外材の流入により一度は崩壊しかけている。森林については、上野村の山深さのお陰もあってか手つかずの原生林が残っており、現在では紅葉が観光資源のひとつとなっている。

以下では、それらに代わるものとして上野村が取り組んでいる産業の一部を取り上げる。

1) きのか栽培

上野村きのかセンターでは、上野村が事

業・管理運営主体となって菌床栽培による椎茸と舞茸の栽培を行っている。これは平成11年度、農林水産省の『山村振興等農林漁業特別対策事業』として3億円(内訳は国庫補助金150百万円、県補助金45百万円、市町村費105百万円)の事業費をかけて始められたものである。21年度実績では17名の職員で1億円超を売り上げている。それでも現段階では黒字ではないが、平成26年までには低地に現在の6倍の面積の施設が稼働する予定であり、上野村が育てている事業の中では最も黒字化に近い。また、Iターン者の雇用の場としても期待されている。ここでは新規就農者のために研修ハウスを設けている。修了者は独立してきのか栽培を行い、それをきのかセンターが買い取る体制をとっている。きのか、とりわけ舞茸は10～3月半ばしか需要がないため、収入源としては季節性がある。それを補うため、菊栽培等との組み合わせが必要とのことである。

2) イノブタ生産

イノブタは、雌ブタと雄イノシシを掛け合わせた食肉用の家畜である。現在のところ、上野村では100頭弱が飼育されている。この事業の事業主体は村であるが、実質の運営はJA上野村が担っており、4名のJA職員が担当している。センターの整備に約9,700万円(うち約9,000万円が地方債)の費用をかけ立ち上げた。

上野村のイノブタ生産には好機が訪れている。かつてイノブタ生産を行う地域は全国にも数箇所あったが、その数も段々と減っているためである。群馬県のブランド豚『上州麦豚』を参考に、飼料に麦を混合させるなど食味向上に向けた工夫に取り組んでいる。イノブタ肉の食味に関しては、特に臭みはなく、

脂の融点が低く甘みがあるのが特徴である。一般の豚肉とは十分差別化されたものである。

3) 食品加工場

食品加工場はJ A上野村が運営している。上野村の特産品であるプラム、リンゴやトマトのジュースのほか、麦味噌『十石味噌』を生産している。麦味噌は瀬戸内以西で盛んであるが、東日本では珍しい。稲作に適さず、麦を主食としていた上野村の地域性が反映されている。

4) 林業・木工業

「1次産業だけでは村内経済の基盤が弱い。しかし上野村に工場誘致をしても不況になれば真っ先に撤退される」との考えから、村内の豊富な森林資源の利用が見直された。特に、かつては関西方面への丸太素材の販売が主であったのを、加工・販売まで手掛けるようにしている。林業版の6次産業化である。

上野村の林業は、上野村森林組合と民間企業3社が担っている。森林組合の従業員約35名のおよそ半数はIターン者であり、こちらも大きな雇用先となっている。元々森林組合は村営の組織ではないが、現在は役場のアドバイスを取り入れながら活動している。それは熟練した技術を持つ人が減り、間伐材で山林を傷つけるなど、山の所有者の不評を買ってしまった経緯があるためである。それ以降、作業員には研修を通じて技術や安全意識の向上を図っているほか、熟練者を雇用して実力の底上げをしている。現在、その効果が現れ始め、山林の所有者の信用と評価を回復してきているところである。

間伐材は、同組合によって箸や工芸品などに加工され村内の販売所や村外のイベントな

どに出品されている。現在の売り上げは約7,000万円。5年後に1億円の売り上げを目標にしている。

5) ペレット生産

間伐材のうち、加工に向かない未熟な原木や樹皮は村営工場でペレット(木質固形燃料)に加工される。また、上野村に豊富にある広葉樹もペレットに加工できる。ペレットはストーブや湯沸かしなどに利用できる。燃焼効率からすると石油燃料より割高ではあるが、地域の資源を使うこと、村内の雇用創出の観点から今年の7月から始めた。

ペレットの特性として、それほど高温の熱を発しないことが挙げられる。したがって保温には向くが、加熱には灯油を併せて使う必要がある。現在は次項に挙げる国民宿舎で温泉の湯沸かしに使うほか、村内施設の一部でペレットストーブを設置して利用している。将来的には家庭へのストーブの導入や、村外への販売を目指している。

6) 国民宿舎

村内にある2軒の国民宿舎「やまびこ荘」と「ヴィラせせらぎ」は、上野村の委託を受けて上野振興公社が運営している温泉宿泊施設である。村外から資金を得る必要があるとの認識から、観光産業の一環として始められた。

国民宿舎建設当時は村民からの期待は小さく反対の声も大きかった。しかし村側の将来を見据えた目的意識の下で推進された結果、現在では首都圏の観光客のみならず、近隣の町村からもイベントや入浴のために気軽に利用されるような施設になっている。

4. 上野村の事業の特徴

前節で列挙したように、上野村の事業は村営または役場が関与しているものが多い。上野村役場の精神として、積極的に国や県の補助制度と地方債を活用し事業を興すという発想が根付いているためである。ただし、単に補助を受けているだけではない。特徴は、使い方への意識である。

第一に、雇用を伴わない施設は絶対に造らないことである。「文化ホール」の類のものを造れば、村外の建築業者に資金が渡って終わりである。そうではなく村内で資金を循環させる「小さな経済」を徹底している。

第二に、全国ないし東日本の中で珍しいものを生産することである。生産規模では他産地に勝てない上野村では重要なブランド力の源になる。

第三に、今、周囲や村民から冷ややかな目線を浴びたとしても、5年後、10年後に役立つものをつくることを心がけている点である。それがきのこ栽培やイノブタ生産、国民宿舎という形となって、コンニャクイモに代表されるかつての主要産業が衰退した現在でも上野村を活気づかせている。市場原理主義に則れば、今ある資源(資金、労働力、材料)を最適な配分で利用し、即座にその利益を得ることが望まれる。それゆえ、短期的な視点のみから村づくりがなされやすい。しかし、上野村の事例は、このような経済的不利地域であるほど中長期的な視点、戦略が必要であることを示唆している。

5. 小さな村にこそあるIターン者の希望

Iターン者の中には、首都圏で勤務していた経験を持つ人もいる。そのような人にとっ

て、上野村に入ることによって所得水準が向上するとは思われない。収入の一部を捨てて彼らが上野村に求めたものは何であろうか。それは、自然であったり、夢の職業であったり、人のつながりでもあったりするだろう。人口約1,300人の村においては、ひとりの存在や働きが村にもたらす貢献は大きい。現在の暮らし向きは慎ましくとも、誇りある村づくりに向けた活躍の場がある。そのような貢献感や上向きの展望を思い描けることが若い村民の生きがいとなっているのではなかろうか。それは、小さな村だからこそその魅力である。

(参考文献)

- ・黒澤丈夫(1983)『過疎に挑む一わが山村哲学』文社ぶっくす
- ・「農山村再生・若者白書2010」編集委員会(2010)『どこにもない学校 緑のふるさと協力隊』農山漁村文化協会
- ・上野村ウェブサイト
(<http://www.uenomura.ne.jp/> 2011年11月29日閲覧)

(謝辞)

本調査は上野村関係者の皆様と全国山村振興連盟のご協力の下実施された。とりわけ、ご多用な中、快くインタビューに応じてくださった上野村役場の市川久美夫部長、土屋雅彦係長、上野村森林組合の今井久司参事、JA上野村の小池銀太氏には心より御礼申し上げます。